

令和元年6月3日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04502

研究課題名(和文)「教師教育としての英語」 教職のための英語教育プログラムの開発

研究課題名(英文) "English as Teacher Education": Content-based English lessons for students in pre-service teacher education programs

研究代表者

池野 修 (Ikeno, Osamu)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：70294775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「教師教育としての英語(English as Teacher Education)」実践プログラムの開発に関わるものである。教職課程で学ぶ学生を対象として、「教育の今日的課題(e.g., いじめ問題, 学力向上, 部活動の削減, グローバル化に対応した教育)」について、目標言語(英語)をコミュニケーション媒体として学ぶというスタイルの語学教育を考案し、その実施と評価を行なった。このプログラムは「教師教育の一環として英語教育」であり、開発したプログラム内容には、目標、テーマ単元、言語習得と内容学習を促すための活動と教材、言語使用の工夫、動機付け方略、評価方法などが含まれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、内容中心教授法(CBI)や内容言語統合型学習(CLIL)の考え方を「教師教育」の分野で具現化した実践を創造した点、「教師教育」と「英語教育」を融合した研究を行なった点にある。また、社会的意義としては、「教職課程を履修する学生(英語を専門とする学生に限定されない)にとって意味のある英語教育とはどのようなものか」という問題意識に基づき、教師教育の一環としての英語教育のモデル事例を提案できたことがあげられる。専門教育(教師教育)のための語学教育(カリキュラム, 単元, 活動, 教材, 評価)について議論するにあたって、考察に値する事例を提供できていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research is concerned with the development of "English as Teacher Education," a tertiary-level English program (including its curriculum, content/language learning activities, learning materials, effective strategies of language use, evaluation methods) in which students enrolled in a teaching credential program learn about current issues in education (e.g., improving academic abilities, truancy, and bullying) through conducting a variety of language learning/using activities in English. It is theme-based language instruction and shares many characteristics with CLIL (Content and Language Integrated Learning) in that learning of content is achieved through and integrated with communicating in the target language. This research is intended to advance the academic and practical knowledge base about the integration of content learning and language learning and also about the improvement of teacher education programs in terms of English education.

研究分野：英語教育

キーワード：教師教育 英語教育 テーマに基づく言語教育 内容言語統合型学習 教育の今日的課題

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「教師教育としての英語 (English as teacher education)」実践プログラムの開発と評価を行う研究であり、「テーマを構成単位とする言語教育 (theme-based language instruction)」「内容言語統合型学習 (Content Language Integrated Learning, CLIL)」「ESP (English for Specific Purposes)」「教師教育」などにも関連する研究である。

近年、外国語教育において(あらためて)注目を集めている考え方に「内容に基づく言語教育 (CBI)」「内容言語統合型学習 (CLIL)」がある。これらは、教科科目や焦点化された対象テーマについて「目標言語で学ぶ」というアプローチである。本研究では、教職課程で学ぶ学生に対して、「教育の今日的課題 (e.g. 「いじめ」「学力向上」「グローバル化へ対応した教育」など)」について、目標言語(英語)をコミュニケーション媒体として学ぶという形の「教師教育の一環としての英語教育」を開発し、英語教育の点から教師教育を改善するモデル事例を提供することを目標としている。

本研究には ESP (English for Specific Purposes) の考え方も関連性を持っている。ESP とは「一般英語 (English for General Purposes)」に比べて、より焦点化された領域のニーズ分析やジャンル分析に基づき行われる語学教育であり、現在までに「医師のための英語」「看護師のための英語」「エンジニアのための英語」といった実践や教材が蓄積されてきた。しかし、「教職」を対象とした、教師教育の一環としての英語に関する実践や実践研究はほとんど存在していない。本研究は、一学期から一年という長い期間にかけて実施する、教師教育と英語教育を統合した実践プログラムを開発し、その実施とその多面的評価に基づきプログラムを修正・精緻化した上で、教師教育事例として提案するものである。

### 2. 研究の目的

本研究の最終目的は「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」プログラムを開発・評価・提案することであるが、研究開始当初は3年間の研究期間(延長申請をしたため実際には4年)において、次のようなことの達成を目標として設定した。

- (1) 内容中心教授法 (content-based instruction) や内容言語統合型学習 (CLIL) の理論及び実践について最新情報を収集し、新たに開発する実践プログラムの理論的基盤を築く。
- (2) 「教師教育としての英語」の実践プログラム構想(6つ程度の「教育の今日的課題」に関する単元からなる)、教材・活動開発、評価方法の開発を行う。
- (3) 開発した実践プログラム、教材・活動、評価方法を教職課程で学ぶ大学生を対象に実施し、探索的実践を行う。
- (4) 実践プログラムの成果と課題の多面的評価に基づき、「教師教育としての英語」を作り直し、完成させる。
- (5) 開発した実践プログラム及び関連の研究成果について発表(論文、口頭発表)を行うとともに、「教師教育としての英語」の教授用資料(ガイドブック)を作成する。

### 3. 研究の方法

「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」プログラムの開発を目指して、以下のような手順に従って研究を進めた。

- (1) **実践プログラムの理論的基盤作り** 内容中心教授法 (CBI)、内容言語統合型学習 (CLIL)、教師教育、教育に関する現代的課題について、包括的に先行研究や最新動向について広範囲に調査を行い、開発する実践プログラムである「教師教育としての英語」の理論的基盤を堅固なものとする。

- (2) **モデル単元の開発** 「教師教育としての英語」のいくつかの単元(「いじめ」「不登校」「学力向上」)を作り上げる。単元開発には次のものも含まれる。

内容中心教授法 (CBI) や内容言語統合型学習 (CLIL) における具体的な目標(内容学習に関するもの、言語習得に関するもの)の検討

言語活動の開発---対象テーマについて多彩な言語活動を通して学ぶというアプローチを取るため、目的に合わせた様々な活動を作成することが必要となる。具体的には、英語での講義、情報獲得のためのリーディング活動、ケーススタディ、各種ディベート活動、ジグソー学習、構造化されたディスカッション活動などである。また、教師教育のための方法・活動についても、関連の議論や研究を参考にしながら、言語習得と統合する形で開発する。

教材開発---対象テーマについての重要情報を提示し、目標言語のインプット・アウトプットを効果的に行うための教材を作成する。教師による講義(英語)で用いるパワーポイント資料、学生が情報収集を行うための英文資料、各種ワークシートやスタディ・ガイドまで、様々な教材を開発する。

効果的な言語使用についての調査---文献研究、質的調査等を通して、効果的な言語使用の中身を明らかにする。

- (3) **モデル単元の実施と評価** 作り上げた実践案のいくつかを試行的に実施し、この実践プログラム全体の評価の仕方を考案する。
- (4) **包括的な「教師教育としての英語」プログラムの開発** 前年度に2~3の単元について試行的に開発した内容を発展させ、包括的な「教師教育としての英語」プログラムを完成させ、

実施する。

- (5) 本格的な実践プログラム評価 前年度で探索的に実施した結果を振り返り、より本格的な実践プログラム評価を行う。
- (6) 「教師教育としての英語」プログラムの精緻化と改善 前年度の実践プログラム評価に基づき、「教師教育としての英語」プログラムを修正する。
- (7) 「教師教育としての英語」教授用資料の作成 教員養成課程で用いるための資料・冊子「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」（仮題）の教授用資料（ガイドブック）を作成する。これには、目標リスト、単元ごとの活動集、授業外学習で用いるスタディ・ガイド、授業で用いるスライド（それぞれのテーマの関連情報などを表やグラフにしてまとめた情報等を含む）、パフォーマンス評価のルーブリックなど、「教師教育としての英語」の実施を支援する様々な情報を含める。

#### 4. 研究成果

本研究で開発した「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」プログラムについて、(1) 理念と特徴、(2) 目標、(3) カリキュラムと単元構成、(4) 主要な活動、(5) 言語使用の工夫、(6) 課題、(7) その他について以下に要約する。なお、スペースの都合により、詳しい解説、開発した教材や活動、評価データとその分析などは十分に示すことができないため、それらの詳細な情報については、池野 (2017a) や池野 (2017b) などの論文、及び『「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」ガイドブック』を参照されたい。

##### (1) 理念と特徴

「教師教育としての英語 (English as Teacher Education)」は CBI (content-based instruction) の一形態である「テーマに基づく言語教育 (theme-based language instruction, TBLI)」の実践である。(近年話題のなることの多い「内容言語統合型学習 (content and language integrated learning, CLIL)」の特徴も共有しており、CLIL 実践と見なすことも可能である。) TBLI の本質は、学習者にとって意味のある、焦点化されたテーマについて、目標言語でコミュニケーションを行いながら学ぶ(いわゆる「英語で学ぶ」という点にある。より具体的に述べれば、TBLI の特徴は次のようにまとめることができる。第一に、カリキュラムの点では、TBLI は、文法項目、使用場面、英語スキル、タスクなどではなく、相互関連性の高い「テーマ」を構成単位 (units of analysis, units of progression) とする。学習内容は、主として当該テーマを学習する上で重要な情報は何かという観点から選択され、配列される。第二に、TBLI は内容学習/言語学習それぞれの目標を持ち、その目標に対応した評価が行われる。これは、従来の一般英語の授業では、内容学習についての評価がなされることはほとんどないこと、純粋な CBI の授業では言語学習の目標はないか、あってもごく補助的な扱いしかされていないのと対照的である。第三に、TBLI では、第 2 言語(習得目標言語)を学習・教授用言語として用い、情報獲得・情報伝達という「真正の (authentic)」目的での言語使用を通して、言語習得を目指す。つまり、言語をコミュニケーションの手段として使いながら学び (learn language through using it for communication)、主に情報や考えをやり取りする中で付随的に言語習得を進める (learn incidentally) という考え方に基づいている。

##### (2) 目標

「教師教育としての英語」プログラムの目標は、(i) 関連情報を英語で読んだり、聞いたりし、他の受講生と意見を交換することで、扱った「教育の現代的課題」について理解を深める、(ii) 扱った「教育の現代的課題」について、自分の考えをより明確に英語で表現できるようになる、の 2 つである。(i) については、臨床的知識、実践的知識というより、一般的知識を習得対象としている。また、(ii) は領域限定的な英語表現能力についての目標であるが、焦点化されたテーマではあっても、英語 4 技能の多様な活動を行うことにより、より一般的な英語コミュニケーション能力を向上させることも方向目標としている。これらの目標の評価は、授業中に行う小テスト(内容学習についてレビュー・テスト)、英語ディスカッション・テスト、英語エッセイなどを通して行う。

##### (3) カリキュラムと単元構成

「教師教育としての英語」で扱うテーマは「教育の今日的課題 (current issues in education)」であり、具体的には「いじめ問題」「不登校」「学力向上」「教師に関する現代的課題」などである。全 15 回の授業では、およそ 3 つ程度の相互関連性の高いテーマを扱うが(1 テーマに絞ることも可能である)、これは、扱うテーマに関するある程度の深まりのある学びを保証するには、4~5 回程度の授業時間は確保する必要があるからである。単元の構成は、扱うテーマの性質により決まってくる。例えば、「いじめ問題」「不登校」などのであれば、問題(現状)→原因→解決(予防・対応)という流れになるし、「小学校英語」であれば、背景→提案されている内容(教科化)のメリット/デメリットという展開となり、「教師に関する現代的課題」であれば、議論されている課題(教職の専門性、教員評価、教師の多忙化)を一つ一つ扱っていくという構成となる。

#### (4) 主要な活動

「教師教育としての英語」を構成する活動として開発したもの（すでにあるものを目的に合わせて作り直したものもある）のうち、主要な活動のいくつか以下に示す。

(A) *Quiz* 前時間で扱った内容を対象に行う小テストであり、対象テーマに関連したキーワードについて問う質問、重要な内容について問う質問等から構成される。英語で回答する。単なる英語力のテストではなく、内容学習の確認としてのレビュー・テストである。

(B) *Vocabulary Check* 当該テーマにおける重要用語を対象とした単語チェック活動であり、所定のシート（左側にターゲット表現、その右側に英語による定義・説明）を用いて行う。ペアになって、片方が英語による説明を読み上げ、もう一方がそれに対応する英語表現を言うという形で単語チェックを行う。

(C) *Read and Tell* ペア/グループを作り、割り当てられた英文を読み、その内容を相手/他のメンバーに英語で伝える。情報格差を生み出すために、一人一人異なる内容の英文が割り当てられる。英文には、多くの場合、概要を示すキーワードのリスト、難単語に対する英語による注、報告で使う表現などを付け加えている。この *Read and Tell* は対象テーマについての理解を深めるための手段として用いており、技能統合（reading → speaking）の活動をテーマ学習の流れの中に組み込むようにしているところに特徴がある。

(D) *Pro & Con Discussion* 賛成・反対が明確に分かれるような点、そのテーマにおいて実際に論争のある点についてペアで議論を行う。例えば、「教師を巡る現代的課題」テーマ単元では、「教員に対する能力給の導入」や「教員の労働時間の短縮」についての賛否の意見を読み、それについて議論を行う。

(E) *Case Studies* 当該の教育問題の事例が提示され、それに対する対応を考え英語で話し合う活動。例えば、「不登校」単元においては、受講生はタイプの異なる4名の不登校生徒の記述を読み、それぞれのケースにおいて、自分が担任であればどのように対応すべきかを考え、その案をグループで紹介し合う。考えるべき点をより焦点化する目的で、また議論を行いやすいように、行うべき対応についての選択肢を提示して、どれに賛成するかを話し合う形にする場合もある。その後、実際に担任教員によって取られた対応について教師が英語で解説するという流れにする。

(F) *Ranking* ディスカッション活動の一種であり、与えられた選択肢を重要度などの観点から順位づけする活動。例えば、「教師を巡る現代的課題」テーマ単元では、「よい教師の条件 (What makes a good teacher?)」として、“high-level content knowledge about the subject,” “skills to motivate students,” “the ability to discipline students when necessary,” “fairness (no prejudice and favoritism)” など18の要素を提示し、その中から最も重要だと考える要素を4つ選び理由を説明する活動を行う。さらに、特徴の異なる4人の教師（高校英語教師という設定、後に中学校教師として再議論）の詳細な記述を読み、どれが最も優れた教師かを決定する活動を行う。

(G) *Micro Debate* 3人組で行う簡易ディベート活動であり、賛成/反対/ジャッジの役割を替えながら、3ラウンド繰り返す形式をとる。例えば、「小学校英語」テーマ単元における“Resolved: That English should be taught as a subject in Grade 5 and Grade 6”, 「塾と学校」テーマ単元における“Resolved: That students in compulsory education should stop going to *juku*”などの論題に対して、*Micro Debate* を用いている。

(H) *Reading Assignments* 当該テーマに関する英文記事を読み、「当該テーマについて学ぶ場合に知っておかなければならない情報は何か」という観点から作成した質問に答える。例えば、「いじめ問題」単元で用いたリーディングを例にとると、“What is the definition of ‘bullying’?” (=いじめの定義) “What are the examples of bullying behaviors mentioned in the article?” (=いじめの例) “What should teachers do about bullying?” (=いじめへの対応) などである。

(I) *My Vocabulary Records* 受講生が「便利だと思った表現」「自分でも使ってみようと思った表現」を毎週5つ選び、所定のシートに記録していく課題であり、学習者の発表語彙の強化をねらいとしている。

これらの活動について、(i) その言語学習に対する有用性、(ii) 内容学習に対する有用性、(iii) 困難度を5段階評定尺度（「1」＝「全く有用ではなかった」～「5」＝「大変有用であった」）を用いて受講生に評価を求めた。結果は表1の通りである。

表1. 主要な活動の評価（言語学習での有用性、テーマ学習での有用性、困難度）

|                    | 言語学習<br>での有用性 | テーマ学習で<br>の有用性 | 困難度         |
|--------------------|---------------|----------------|-------------|
| A Quiz             | 3.70 (1.11)   | 4.24 (0.87)    | 3.00 (0.96) |
| B Vocabulary Check | 4.34 (0.81)   | 4.45 (0.69)    | 3.00 (1.00) |

|   |                       |             |             |             |
|---|-----------------------|-------------|-------------|-------------|
| C | Read and Tell         | 4.69 (0.54) | 4.38 (0.62) | 3.76 (0.88) |
| D | Pro & Con Discussion  | 4.45 (0.74) | 4.55 (0.57) | 4.03 (1.05) |
| E | Case Studies          | 4.24 (0.83) | 4.66 (0.48) | 3.72 (1.07) |
| F | Ranking               | 4.24 (0.69) | 4.41 (0.63) | 3.41 (1.09) |
| G | Micro Debate          | 4.72 (0.45) | 4.55 (0.57) | 4.14 (1.03) |
| H | Reading Assignments   | 4.35 (0.67) | 4.52 (0.57) | 3.21 (0.98) |
| I | My Vocabulary Records | 4.28 (0.59) | 2.90 (1.15) | 2.03 (1.27) |
| J | 英語ディスカッション・テストの準備     | 4.03 (0.82) | 4.03 (0.82) | 3.55 (1.06) |

平均値（標準偏差）

全体としては、5段階評価で平均値が4.0を上回っている活動がほぼ全てであり、ほとんどの活動が英語力向上、テーマ学習の両方に対して役立ったと認識されている。具体的にどのような点で効果があったのかに関する質的データやその分析については、池野（2017b）の論文の中で提示している。

#### (5) 言語使用の工夫

「教師教育としての英語」では、情報獲得&情報伝達的手段として英語を用いる（90分間の授業中に日本語を使うのは5～10分間程度に限られる）。第1言語（日本語）で行うテーマ学習とは違って、様々なTeacher Talkの方略を考案して実施している。例えば、(i) 一度に話す量（時間）を限定する、(ii) 音声チャンネルだけの伝達を避け、スライドで視覚的情報を提示するとともに、その情報のどこに注目すべきかを焦点化し、視覚的情報と統合された語りとする、(iii) 受講生に誘出質問をしたり、説明をクイズ形式にしたりして、インタラクティブに話す、(iv) 最初にある内容について受講生に話してもらい（例えば、関連のデータを描写する）、その後同じ内容を教員が話す、(v) 教師が用いている英語表現に注目させる仕組みとして、前述のMy Vocabulary Recordsを活用する、などである。詳細については、『「教師教育としての英語（English as Teacher Education）」ガイドブック』を参照されたい。

#### (6) 課題

開発した「教師教育としての英語」プログラムは、その理念、主たる活動の内容学習/言語学習への有用性、意欲を高めるための方略、言語使用などについては、全体としてプログラム受講生から高い評価を受けた。しかし、課題も残っている。具体的には、(i) Read and Tell などにおける、読み取った内容を自分なりの言葉で言い換えて伝えるためのトレーニングが必要であること、(ii) 目標言語（英語）で行う内容学習の幅と深さが、第1言語（日本語）で行うそれと比べて制約されるのを十分には解決できていないこと、(iii) 内容学習の評価としてより妥当で実施しやすい方法を考案しなければならないこと、などがあげられる。

#### (7) その他

この報告では、「教師教育としての英語」の全体的な内容の概要について記述したが、代表的な単元例の1つである「いじめ問題」テーマ単元の実践（4授業時間）については、池野（2017a）において、その単元構成、言語習得と内容学習を促す活動と教材、評価データ（e.g., 英語エッセイのデータ）の分析などを詳説している。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- (1) 池野修 (2017b). 「教育の現代的課題について英語で学ぶ-教職課程における内容学習と言語学習の統合-」『四国英語教育学会紀要』, 査読あり, 第37号, 15-30.
- (2) 池野修 (2017a). 「「教師教育としての英語」-「いじめ問題」テーマ単元の実践-」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』, 査読あり, 第14号, 107-124

〔学会発表〕(計 4 件)

- (1) 池野修, 「『教師教育としての英語 (English as Teacher Education) プログラム』-教職課程における内容学習と言語学習の統合-」, 第 44 回全国英語教育学会・京都研究大会, 2018
- (2) 池野修, 「『いじめ問題』について英語で学ぶ-『教師教育としての英語』の実践-」, 第 56 回国際大会, 2017
- (3) 池野修, 「『いじめ問題』について英語で学ぶ-テーマ学習と言語学習の統合-」, 平成 28 年度教育大学協会四国地区研究集会, 2016
- (4) 池野修, 「『教師教育としての英語』-『いじめ問題』単元の実践の成果と課題-」, 第 28 回四国英語教育学会・高知研究大会, 2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕  
ホームページ等

- (1) 池野修 (2018). 『『教師教育としての英語 (English as Teacher Education)』ガイドブック』  
(全 22 ページ)

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

(2) 研究協力者 なし

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。